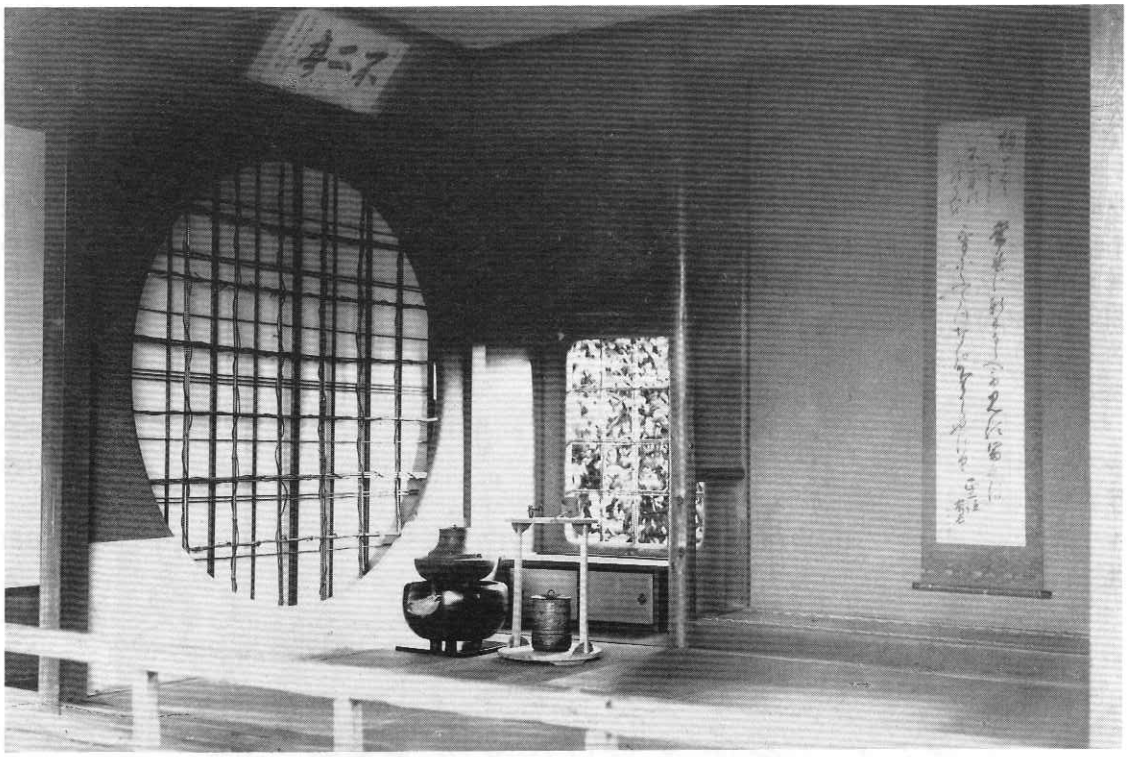
三島市

（通巻第33号）

# 郷土館だより

Vol. 11. No.3
1989. 3. 20



## 三島宿本陣史料展

### 3月25日～6月30日

江戸時代、箱根という峻剣な山を隣に控えた三島は、東海道を往来する様々な旅人が休泊する重要な宿場として栄えていました。西の新宿境から東の新町橋まで、街道沿いははたごや商家が軒を並べていたものです。

そうした宿場の賑わいの中でも、中心は明神前（現在の三島大社）と本陣の界わい（現在の本町）でした。三島宿には樋口本陣と世古本陣という二軒が向い合って営業していたから、その賑わいと華やかさが想像できます。

本陣は大名や公家、その家臣と幕府役人などが休泊する宿場の重要な設備でしたから、本陣を務める家は経済的にも町の有力者があたったものです。

本企画展の展示品は、上記二軒のうち一軒の樋口家から提供を受けた史料が主になっています。本展示を通して、本陣及び三島宿の一端がご理解いただければ幸いです。

展示物のおもなものは、街道沿いの全家屋を解読した三島宿街道軒並絵図。 144体の大名行列人形（展示は４月24日まで）。三島市の指定文化財樋口本陣文書約50点と解読文。樋口・世古両本陣の間取図。大名、公家等の名前を書いた関札・行在所札。三島宿の風景浮世絵。そのほか三島宿本陣に関する写真、パネル等を展示します。

# 本陣家文書「諸御定宿仮控」から

昨年度の本陣家文書「諸御定宿仮控」（上）の解読集刊行に続いて、本年度はその(下)巻を発刊いたします。

この史料は三島宿本陣の一軒の樋口本陣を定宿（通行の度に利用する指定宿）にしていた諸候や公家、門跡及びその家臣たち等の宿泊記録です。同時にこれは樋口家にとっての常連宿泊客名簿となっていて、諸家（及び人物）がいろは順に詳細に記載されています。

今度刊行する(下)巻によって、樋口本陣の定宿指定諸候がほぼ明らかになるわけですが、本解読集を単なる記録のら列と見ないで、歴史研究の有効な史料集として活用して頂くことを望みます。

そのような利用法の一例として、ここでは(下)巻の編集作業中に拾い出した話題の一つを紹介したいと思います。

**京都御上使**
**吉良上野介様**
貞享弐丑四月廿四日御上り御休
御供御家老　佐藤善左ェ門様
長坂孫兵衛様
御宿割　鈴木平助様
御賄方　谷九左ェ門様
貞享三寅三月三日御下御泊京都御上使
御供御家老　佐藤善左ェ門様
御取次　清水段右ェ門様
御宿割　柳原十兵衛様
御賄方　鳥居又左ェ門様
同四卯年二月十日御下御泊右同断
御供御家老　斉藤善左ェ門様
小林平八郎様
御用人　左右田孫兵衛様
御取次　永松定左ェ門様
御賄　岩田波右ェ門様

**吉良上野介が宿泊**

「忠臣蔵」の一方の主役、吉良上野介は、まだ40才代の若き時代に「京都御上使という役を負って、家臣とともに3回宿泊しています。

### 吉良家と上野介

吉良家は江戸幕府の高家として石橋、品川両家とともに元和元年（1615）に登用されました。高家とは足利時代には公方と称されるなど、禄にかかわらず地位の高い家柄として認められていました。その職域は宮中への使節、日光への御代参、勅使、朝臣幕府の接待、柳営礼式の掌典など（『職掌録』）で、公郷との交際は広く、宮中と接するので官位は高く、自らの地位に対する誇りは相当のものだったといいます。

史料中の上野介（吉良義央）は、四位少将として典礼に精通し、高家中の最古参であったから京官を殿中に接待するには頗る権威があったとされます。（『国史大辞典』）

上野介は寛永18年（1641）に生まれ、元禄15年（1702）12月14日にご存知赤穂浪士の討入りによって61才の生涯を閉じました。誕生から推算しますと、第１回目に本陣御休み客となった貞享弐年（1685）は44才の時となります。上野介全盛の頃と言ってよいでしょう。

### 吉良家の家臣について

上野介の京都御上使の供として旅をした家臣にも歴史上に名前を残した者がいました。小林平八郎（1660～1702）は、元上杉氏の臣で剣士でした。上杉定勝の娘が上野介に嫁ぐのに従い吉良家の家臣となり、上野介の家老となります。元禄15年の赤穂討入りに際しては勇敢に奮戦するが、ついに赤穂浪士堀部らによって殺害されました。

左右田孫兵衛は上野介の家臣でしたが、元禄の事件後上野介の子義周に従い、義周の最後を見とる忠臣となっています。（『大人名辞典』）

上記してきたように、本史料集中の一ページの中にも、私たちが歴史の教科書や芝居でしか知り得なかった過去が眠っているのです。

ぜひ興味をもって読んでいただきたいものと思います。

## 古文書を判読します。

### 古文書読習会

郷土館の企画展「三島宿本陣史料展」に協賛し、期間中、市民が持っている古文書を読んであげようーと、三島古文書読習会（長谷川福太郎会長）が計画しています。

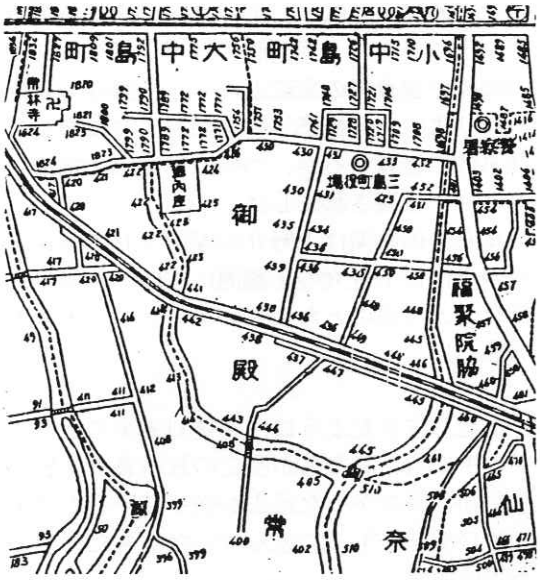
計画では５月、６月の土・日で午後１時30分から３時30分まで。郷土館一階の「三島宿本陣史料展」会場で。同読習会の会員(22人)が交代で受持つ。会員は最近〝家庭に眠っている貴重な古文書を読んでほしいという人が増えたことと、今迄知られていなかった意外なことが分かったり、過去の文化を再発見するきっかけになれば〟…と話しています。

古文書読習会は毎週第２・第４の土曜日に郷土館で勉強会を開いています。昭和48年郷土館の古文書講座に参加した人たちが、元館長であった長谷川福太郎さんの元で郷土史の研究を含め「三島古文書読習会」として発足

▲古文書を判読しあう会員のみなさん。

しました。以来15年を経過し、地道に勉強を続けた会員たちは近隣の旧家や、史跡を訪ねたり、著名な講師を招き講習会を開くなど研賛に励み、特に三島市の指定文化財である樋口家所蔵の本陣家史料を継続し解読中で、すでに郷土館により、三島宿本陣家史料集(1)～(5)を発刊。本陣研究家、歴史愛好家の好評を得ています。

# 御殿地と三代




社会保険病院一帯は、かって「御殿地」(＝左図参照。) と呼ばれ、明治初め頃までは、石垣に囲われており、たぬきやむじなが住む荒れ薮だったといわれます。

ここは徳川三代将軍家光公が、上洛（京に上ること）のため旅館を造営したところです。

元和９年(1623) ７月、家光は父将軍秀忠と共に上洛し、天皇より将軍職に任命されますが、これに先立ち各地に上洛のための御殿を新築させています。その一つがこの御殿地でした。

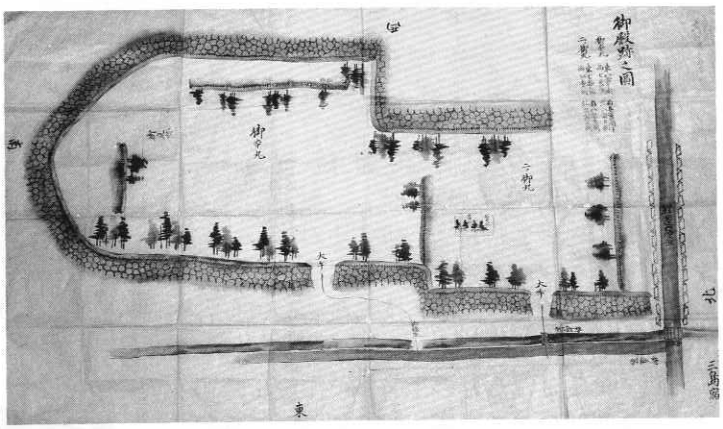
### 三島御殿

郷土館三階に展示されている御殿地の絵図（写真）は、幕末に作製されたものですが御殿の様子がある程度推測できます。本丸・二の丸の二つの曲輪（くるわ）を備え、石垣・土累が東南西の三方に巡され、北の三島宿側も土累が積まれています。この地は、南に伸びる舌状台地で、西の四ノ宮川・東の御殿川が南で合流し、守りに堅固な城館となっています。

大手口は二ヶ所、東の御殿川に向けて開けられ、橋がかけられています。この道は、現在の御殿橋と、その北側に架けられている橋と思われます。

大阪夏の陣より８年、旅館でありながら、万一の敵にも備え、城塞にもなりうる館です。

内には日本庭園も備えており、建物も長く使用される事を念頭に建造されたようです。




▲

| | 東 | 西 | 南 | 北 |
|---|---|---|---|---|
| 本　丸 | ８１間 | ７４間 | ５４間半 | ８５間 |
| 二ノ丸 | ７３間 | ４６間 | ８５間 | ９３間 |
| 惣廻り | １５４間 | １２０間 | １４０間 | １７８間 |

広大な土地を占めていた事がわかります。

恐らくは、同時期に将軍の旅館として築城された京都二条城同様、書院造りで華麗な桃山様式に彩られた建築であったと想像されます。

造営には、日下部（くさかべ）定勝権丸郎左馬允（武蔵国児玉郡、知行地 700石）が三島御殿造営奉

# 将軍家光

行に命ぜられ指揮にあたっています。

又、御殿地は元柳原とも呼ばれ、古くより揚原神社を始め、仙台山福聚院・正福山揚原寺が鎮座していましたが、この時、移転させられています。(現在の市役所南側の地域へ)

**家光の三島滞在**

家光は生涯の内三回上洛し、記録に残る限りでは4回、三島に滞在しています。すなわち元和9年(1623)上洛の時の7月1日、寛永3年(1626)8月に上洛し、10月16日江戸に帰る時、そして寛永11年(1634)6月24日上洛の折と、帰りの8月17日です。

(徳川実記)

いずれも一泊ないし二泊ですが、初めて箱根を越え三島へ到着した時の印象はかなり強かったらしく歌を吟詠させています。

**三嶋駅　大窪詩仏**
**古駅西偏接翠疇**
**秧歌聲裡雨聲収**
**浅間祠下一泓水**
**散作千村萬落秋**

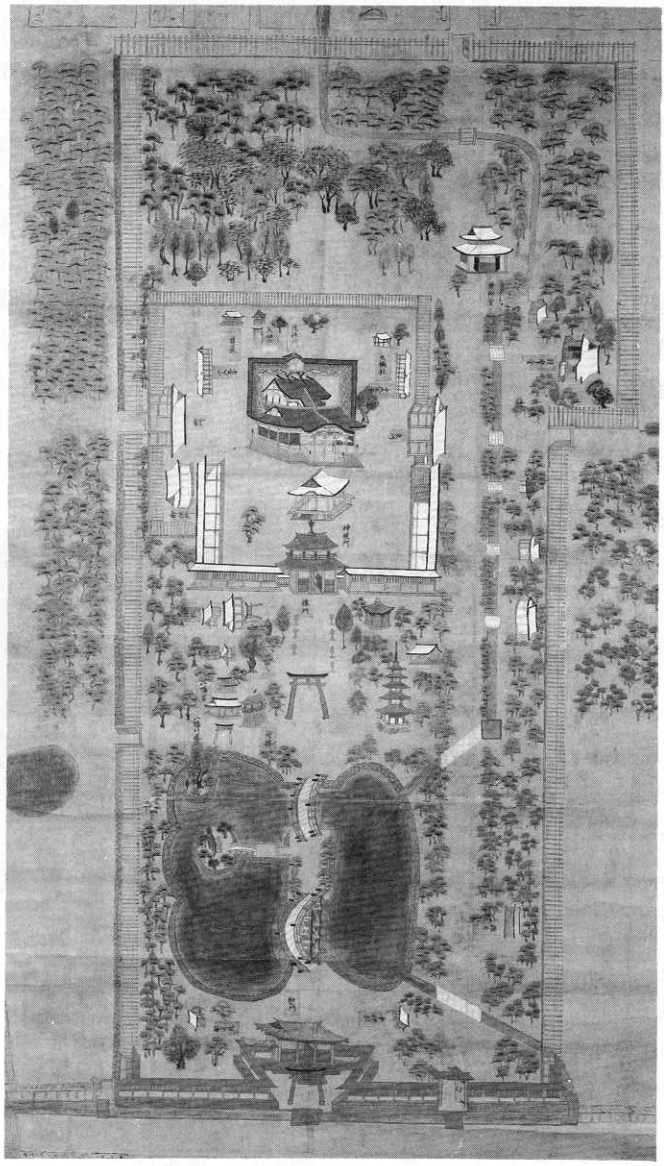
**三島暁発　菅茶山**
**四顧林密尚杏范**
**燕脂誰作富山粧**
**只疑夜半零紅雪**
**不識霄間己旭光**

払暁に旅立った家光は、水清らかで緑多い三島宿と朝焼けの富士の美しさにいたく感じ入った様です。

**家光の三嶋大社造営**

又、寛永11年の帰府の時、ここ三島御殿において三嶋神社(三嶋大社)の造営を命じています。

**▼家光の造営した当時の三嶋大社**



周知の通り三嶋大社は鎌倉幕府を開いた源頼朝以来、武家の尊崇篤(あつ)く、徳川家康も社殿の造営を行なっています。(慶長９年1604)。この時は切妻の拝殿と本殿だけの簡素なものでした。尊敬する祖父の遺志を継ぎ、大社を整備しようと志したものでしょう。

家光が造営した社殿は桧皮葺(ひわだぶき)の本殿と拝殿で、拝殿には唐破風(からはふ)の向拝(こうはい)を付け、極彩色が施された華麗なものでした。

神域には楼門と回廊が巡らされ、五重塔一基・鐘楼の他鳥居が市ヶ原の通りと、境内２ヶ所据えられ、豪荘な建築群となっています。この頃建築された日光東照宮(1634～36)等と同様に桃山建築の様式を伝えていたものと思われます。

しかし、承應三年(1654)に、新たに運営されている事より、恐らく慶安元年(1648)の三島宿大火で焼失したものと思われます。わずか10数年の景観だったようです。

### ４．御殿のその後

さて、この御殿は、家光以後使用されませんでした。最後に家光が上洛した後、以後の将軍の上洛を禁止しています。天皇と将軍が直接対面し、両者の意見が食い違った場合、さしさわりがあるとの判断からです。（岳南史）

このため、御殿は使用されず、その後とりこわされたともいわれ、土地は荒れるに任せられました。

それから約200年ぶりに、文久３年(1863)３月、将軍家茂(いえもち)が、上洛の旅に出ます。尊王攘夷にゆれる国内の危機的状況の中で、天皇と将軍家の関係を強化する目的でした。

先に示した絵図は、この前年７月に作成されており、家茂上洛の旅館として使用するかどうか検討するために提出されたものと思われます。結局家茂は、三島には宿泊しませんでした。

明治以後の御殿地の変化は激しく、明治19年、君沢・田方郡役所が移転され、同31年には、豆相鉄道（伊豆箱根鉄道）が東西に横切り、その後、社会保険三島病院が開設、道路も拡幅され、繁華街となっています。

「御殿地」の名も、住居表示の変更で消え、「御殿神社」と「御殿川」「御殿橋」に名を残しています。

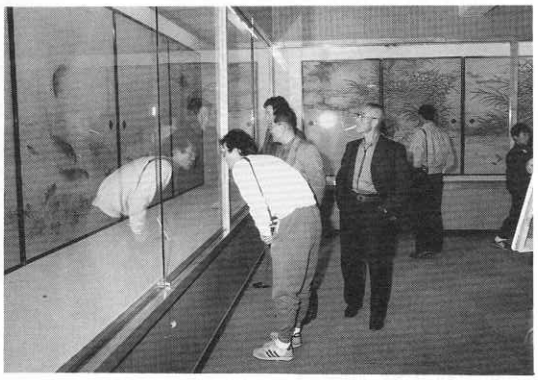
そして、東側に石垣の一部と、大手門に続くコウラブセの石だたみが、かつての御殿の面影を残すだけとなりました。

## 特別公開

### 「楽寿園装飾絵画展」終わる

２月４日から３月17日まで郷土館で、楽寿園と郷土館主管による特別公開「楽寿園の装飾絵画」展を開催しました。これは楽寿園の屋根がわらの全面ふき替え工事に伴い、同館のふすま絵等を郷土館に展示し、期間中いつでも見られるように一般公開したものです。

展示された絵画は主室の「楽寿の間」にある装飾絵画のうち、ふすま、腰ふすま、天袋地袋、杉板戸に描かれた日本画11点34面。作品は池中鯉魚図（ふすま＝野口幽谷）　千羽千鳥図（同＝滝和亭）　梅樹鴛鴦図（杉板戸＝能谷直彦）　雪汀鴨図（同＝杉谷雪樵）　双鶴図（同＝鶴沢守保）　王朝風俗図（天袋＝狩野寿信）　清女捲簾図（同＝山名貫義）　管三品草文図（地袋＝川辺御楯）　蘆雁図（杉板戸＝幸野楳嶺）　鷺鳥図（同＝村田香谷）　地亭賞月図（天袋＝遠藤貫周）。

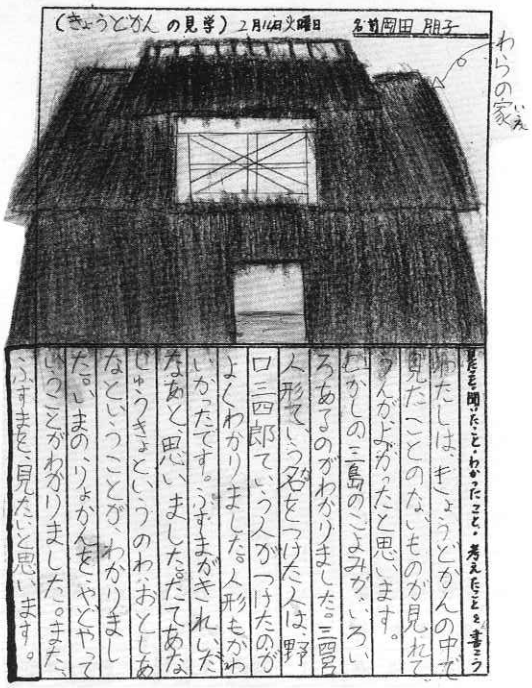


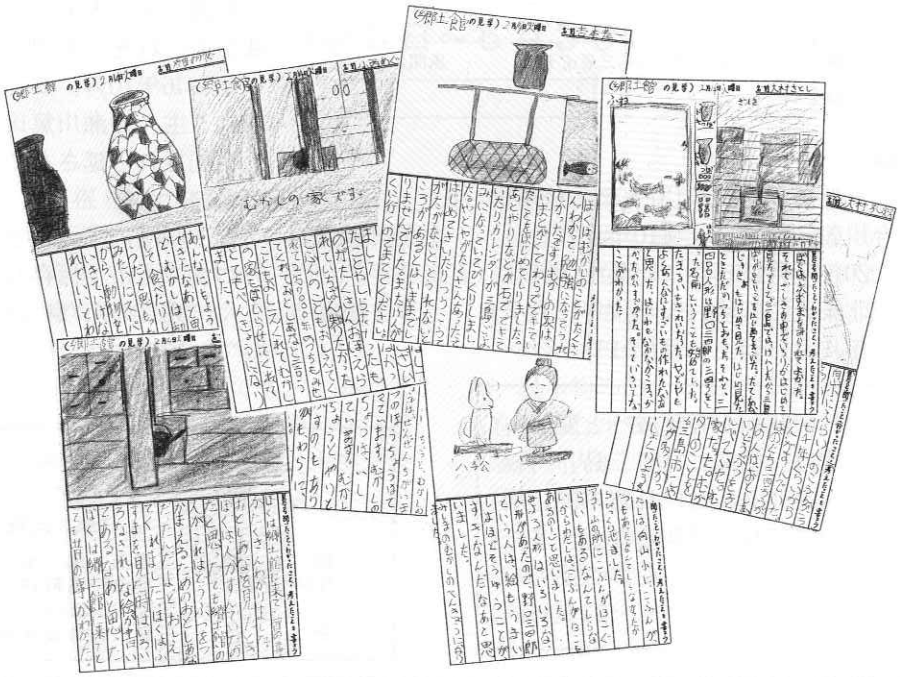
展示室の明るい照明に照らし出された絵画は、いずれも色彩があざやかに浮かび上がり多くの人が絵のすばらしさに驚いていました。

# 届いた小さなたより

## ― 郷 土 館 見 学 ―

２月から３月にかけ、市内の小学校３年生が相ついで郷土館を見学しました。そのうち向山小学校の子どもたちから、かわいらしい便りが届きました。子どもたちの素朴な感動と観察力にあふれた感想文の一部をご覧下さい。



（迎　春）

（つばめ）

（子守り）

## ■収集資料紹介

| 資料名 | 点数 | 受入日 | 提供者 |
|---|---|---|---|
| 肖像画(河辺恒次氏) | 1 | S63. 6. 18 | 浜松市和合町　東　昇二氏 |
| たんす | 1 | S63. 7. 28 | 三島市中央町　鈴木　敏弘氏 |
| 枡(醤油２ℓ．１合) | 2 | S63. 9. 3 | 三島市大場　杉山　浪子氏 |
| はかり | 1 | S63. 12. 8 | 三島市芝本町　長円寺 |
| 凌頂書「帰去来賦」 | 1 | S63. 12. 9 | 鎌倉市　贄川　真彦氏 |
| 卓郎書「俳句」 | 1 | 〃 | 〃　〃 |
| 三四呂人形「迎春」 | 1 | S63. 12. 13 | 三島市東本町　瀬川　延氏 |
| 〃「つばめ」 | 1 | 〃 | 〃　〃 |
| 〃「子守り」 | 1 | 〃 | 〃　〃 |
| 八反馬鍬 | 1 | S63. 12. 14 | 三島市玉川　風間わか子氏 |
| 下刈り鎌 | 1 | 〃 | 〃　〃 |

### 寄託資料

提供者　駿東郡清水町長沢131－２　松崎信一氏

史料名　今川義元判物（天文10年５月５日）　北条氏康判物（天文20年７月15日）　北条氏印判状（天正２年７月10日）　北条氏印判状（天正17年12月７日）　秀吉掟書（天正18年４月）以上８月12日受。

編集後記……昭和から平成へと変わった年。本年度は「新聞に見る三島」「紙芝居」「呑山と他石」「三島宿本陣」展を開催し、それぞれが話題となり、多くの反響がありました。皆さんのご協力を感謝申し上げる次第です。　（職員一同）

### ご寄贈頂いた三四呂人形
### 瀬川　延さんから

東本町２－２－22にお住まいの瀬川延さんから、三島市の文化財に指定されている三四呂人形３点を寄贈いただきました。**＝写真。**

三点は「迎春」「つばめ」「子守り」で、郷土の人形作家野口三四郎の作品で、いずれも和紙で作った張り子の人形。「迎春」には漆が塗られ光沢を出しています。

昭和46年10月、郷土館開館と同時にご主人の瀬川篤氏（故人）から寄託され、延さんに引継いでいたものです。

延さんは「主人の意志でもありいつまでも市で保存し、市民の皆さんに見ていただければ…」と話しています。

**郷土館だより** №33
平成元年３月20日発行
（年３回発行）
編　　集　三島市　郷　土　館
住所 〒411　三島市一番町19－３
TEL 0559－71－8228
発　　行　三島市教育委員会